

- 1 派遣期日 令和4年 10月28日（金）
- 2 派遣先 凌風学園 京都市立凌風小中学校
京都市南区東九条下殿田町56
<https://cms.edu.city.kyoto.jp/>

3 研修内容

本年度の京都市教育委員会「学力向上実践推進事業重点支援校」「GIGAスクール教育ソフトモデルウェアモデル校」である凌風学園の研究報告会に参加させていただいた。凌風学園では、「学園生の豊かな創造力の育成～主体的に学び続ける姿をめざして～」という研究テーマのもと、授業改善と授業力の向上に取り組んでおり、昨年度からICTを活用した授業改善の実証研究として、パフォーマンス課題を活用した授業デザインの作成と実践についての取り組みを継続しているとのことであった。研究報告会では、はじめに全体会で研究の概要について報告があり、公開授業参観、研究協議への参加、最後に京都大学大学院教育研究科 西岡加奈恵教授の講演を拝聴した。

学校課題研究を進める上で参考となった凌風学園の学力向上のための取り組みと、公開授業の参観や講演を通して学んだパフォーマンス課題について、以下述べていきたい。

（1）学力向上のための取り組み

研究の重点的取り組みとして、「主体的な学びを重視した授業作りの研究と教科部会の充実」「主体的に学ぶ態度を育む日常の授業改善」「学習習慣の定着と自主学習の態度の確立」「生き方探求パスポートを活用したキャリア教育の推進」が掲げられていた。小中一貫校として、常に学びの連続性を意識して取り組みを進めるために、「そろえて（共通）・つないで（系統）・わかりあう（共有）」を取り組みのキーワードとし、主体的な学びと家庭学習習慣の定着につながる授業改善を図りながら学力の向上を目指している。

授業改善のために、教師は常に学園生の育ちに有効であったかを振り返り、教師自身の力量アップの機会とする必要があり、授業研究会と事後研究会を通して、学園生を見る目を鍛えている。5プロジェクト（5SDGsと5RULES）に基づいて、主体性を育む授業作りの基本姿勢として発達段階に応じた学習規律、授業スタイル、発表スタイルを確立し、家庭学習習慣の定着を目指して、授業と家庭学習の連動を意識した授業改善を図っている。

5プロジェクトの「5SDGs」とは、授業フレームの定型化で、学年が変わっても先生（教科）が変わっても1時間の授業の取り組み方が一定しているということで、授業時の最初の5分と最後の5分の活用を踏まえた「授業フレームの構築」と「家庭学習との連動」へ向けて学園全体で同じベクトルをつくっている。その際には、デジタルドリルを「個別最適な学習」「反復と徹底」「授業の幅を広げる」という視点で活用している。

「5RULES」とは、主体性を育む授業作りの基本姿勢のことで、教員が意識している共通項目（教への作法）であり、下記の視点が挙げられている。

- ・学習規律が明確で徹底されているか（授業準備・挨拶・着座姿勢・発言・交流・提出物等）。
- ・授業の目標（めあて）が明確か。授業の流れが明確か。
- ・視覚的、映像的、体感的な学びがあるか（板書・ノート作り・資料提示・ICT活用）。
- ・一人学びの時間があるか（読む・調べる・考える・まとめる）。
- ・交流や発表する姿があるか（知識の共有、学び合い）。

教への作法は、授業のみならず、あらゆる教育活動の際に指導者が意識する共通項目として、学園生の主体的な活動を育む指針としている。

児童の学力向上のためには、学校全体で学習環境を整えることや、教師の確かな個の見取り、授業と家庭学習の連動、そして授業改善と授業力向上が大切であることを改めて実感した。

(2) パフォーマンス課題について

パフォーマンス課題とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題で、具体的には論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価することである（講演資料より）。

参観した3年生の社会科のパフォーマンス課題は、「京都市には、たくさんのみやげ物があり、どの商品がいいか悩んでしまいます。それぞれのよさをお客さんに伝え、買う時の参考にしてもらえるようにみやげ物図鑑を作りましょう。」であった。図鑑を作り、評価するための課題がパフォーマンス課題ということになる。6年生の理科では、「ここに正体の分からない6種類の液体があります。これらの水溶液の正体を解明してください。解明する際には、その理由を明確にし、後期課程の理科の先生が納得するようにまとめましょう。」という課題で水溶液の性質について学習していた。8年生の数学科では、「あなたは携帯会社の営業担当です。お客さんの使用状況に応じて、最もお得なスマホの料金プランを4つの中から提案し、プレゼンしましょう。」という課題で一次関数を学習していた。他の教科でも目的が明確で、日常生活と結びついた課題が多く提示されており、どの授業でも学園生は意欲的に学習に取り組んでいた。

パフォーマンス課題が単元のはじめに提示されることで、単元のゴールに向って、毎時間学習の目的と見通しをもって取り組むことができ、学習を重ねる毎に学ぶ姿勢にも変化が表れていくはずである。

パフォーマンス課題を設定するにあたっては、以下のようにワークショップを行っている。

- ①単元を選ぶ（適切なサイズの単元を設定する）。
- ②単元の中核に位置する重点目標に見当をつけつつ、取り組む課題のイメージをもつ。
- ③「本質的な問い」を明確にする。
- ④その問いに対してどのようなレベルの答えに達してほしいか（「原理や一般化」についての「永続的理解」）を明文化する。
- ⑤パフォーマンス課題のシナリオを作る。

「本質的な問い」には、単純な一つの答えがなく、「どのように～すればよいのか。」「～とは何か。」という教科の中核に位置する重要な内容を分かるようにすることを促すような問いであることを、講演では強調されていた。研究協議に参加して、凌風学園の先生方が研究・研修を重ねながら授業デザインを作成し、実践していることを聞いて、単元構成並びに課題設定の在り方について考えさせられた。

4 感想

この3年間、コロナ禍で校外での授業参観の機会がほとんどなかったため、本研修はとても良い機会となった。凌風学園は小中一貫校ということで、9年間で学びの作法の習得や言語活動の充実、キャリア形成支援を行っており、9年間で「4×3×2」の3つのステージに分けてすすめる、5年生から50分授業を実施しているなど、特色のある学校であった。一方で、「基本的な生活習慣や家庭学習の習慣」「言語環境」「継続性・持続性」「見通しをもった行動力」などに課題が見られ、適切な指導・支援が必要なことから、研究に取り組んでいるようで、同じような課題が本校にも見られるので参考となるが多かった。

先にも述べたが、学力向上のためには、教師の共通の認識のもと基本的な生活習慣の徹底や基礎的な学習内容の定着を図ること、そして授業改善・授業力向上を目指す取り組みが大切であることを実感した。ICTの活用については、日立市でも取り組んでいる内容が多く見られたので、学校全体で研修の機会を設けるなど、今後も積極的に活用していく必要があると感じた。

本研修を通じて学んだことを、学校課題研究や日々の授業で実践していけるよう研修に努めたい。